

# 大陸（北支）

## 第六十九師団

### 河南・靈宝作戦の苦闘

秋田県 福田 悟郎

秋田市榑山餌指町五一が私の生家で、大正十年十一月二十二日生まれでした。七人兄弟の四男で下から三番目でした（二人死亡）。尋常高等小学校は秋田市で、卒業後青年学校へ入り、秋田県庁の秘書課に二〜三年勤務した後、動員をされました。

第八師団と第九師団とで新しく第二十一師団が編成され、徐州陥落後の昭和十三年五月十三日、徐州で軍属が欲しいというので、私は志願して採用されました。

昭和十四年一〜二月ころ、宇品を出発、大沽上陸、天津、濟南、徐州、そして師団司令部で勤務していたのですが、部隊は第十三師団と交代し三年もおりました。昭和十六年になり大移動、保定に二〜三カ月、さらに青島経由で内地帰還となるのですが、奇しくもその日は十二月七日で日米開戦の前日でした。青島港に三隻いた米国の軍艦は既になくなっていました。

乗船してから『日米開戦』を憲兵隊から初めて聞いたのです。船上で直ちに對潜訓練をされ、我々は上を下への大騒ぎです。内地帰還の理由は私が入営の通知を受けたからです。師団司令部の上司に申告しますと、「現地で入営すればよい、手続はしてやる」と親切に申されたのですが、三年も故郷に帰らず戦地に行くのは心苦しい。「父母と会って後顧の憂いをなくしてか

ら戦場に行きたいのであります」と申し出て帰国したのです。

神戸上陸、秋田市で壮行会を開いてもらい盛岡集合、歩兵第百三十一連隊で装具一切を受け、盛岡で一週間、その間は森久旅館で泊まり連隊へ通いました。簡単な軍装をし、夜間隠密裡に、だれにも分からぬよう門司から出港、人数は東北管区各地から集まった初年兵で、盛岡から三五〇人くらい、全員で一千名くらいだったと推測します。船は貨物船、絶対に人を甲板には出さぬ夜間行動です。開戦直後ですから企図を秘匿していました。

出航の日は昭和十七年二月初旬、支那山西省平遙県城の初年兵教育隊に入ったのが二月十日、部隊は独立混成第十六旅団、独立歩兵第八十四大隊でした。一期の教育は四カ月で終わった。主力は中支の浙贛作戦に出動中であるためか、教育期間六カ月が二カ月短縮されたということでした。

教育が終了し、直ちに第一線に配置された。北支には蒋介石軍の閩錫山軍と中共の八路軍がいる治安の

悪い所です。閩錫山軍は太原作戦で我が第五師団にやられ逃げて日本軍の西側に、東側には八路軍が蟠踞し、我が方の治安を乱していました。

部隊からは警備のため、主要鉄道線や道路沿いに分遣隊が配置されて、我々は太原―蒲州間の南同蒲線を守備していました。鉄道線の西側は全部敵です。先ほど申し上げたように西方は閩錫山の山西軍、東側は共産八路軍です。しかも、敵である蒋介石軍と共産軍が利害を異にしながらも国共合同で日本軍をねらっているから、油断も隙もないのです。

占領地は面ではない。点と点であり、その間を結ぶのが鐵路であり道路です。従って日本軍の拠点は大きい城のある都市、治安の悪い所には一個小隊、他は分隊単位の分遣隊が配置されています。山西省平遙、霍県などが我が大隊の警備地域でした。小さい敵襲は度々ありましたが、私が行く前、大鉄橋の分哨が八路軍に襲撃され全滅しました。八路軍はこちらが弱いと攻撃し、強いと逃げるといふ常套の戦法です。

山西軍の方は日本軍の上層部と交渉し、自軍が損害

を被らない戦法です。両者工作をしていたようですが、ある時は戦い、ある時は仲良くするので、我々兵隊は不思議に思っていました。そのような内部状態を把握してはいませんでした。

一方、八路軍に対しては徹底的に討伐していて、山西軍とは全然違っていました。国府軍人は鷹揚で、人間的な性格でありましたが、共産軍は酷しく妥協がなかった。伝単（てんたん中国で宣伝ビラ）を撒いて日本兵を勧誘してもいました。人材も武器も情報も欲しかったのでしょうか。我々の部隊では八路軍に入った者はなかったが、後には思想的な関係者や、軍務が厳しくて逃亡して共産軍に入った者がいたと、戦後聞いたように思っています。

私たちの時は、初年兵教育が四カ月に短縮され各分遣隊へ配属されましたが、行った途端に、憲兵隊志願を勧められ、旅団司令部で予備教育があったのです。その間に西瓜を食べてA型パラチフスになり、四〇何度の熱が出て、汾陽の旅団司令部から陸軍病院に入院。一カ月くらい教育が受けられず原隊復帰を命ぜられま

した。

帰ったら、今度は暗号兵になれば、大隊本部で教育を受け、終了したら分遣隊へ派遣され暗号勤務をしていましたら、「福田帰れ」の電報がある。帰隊すると上等兵に進級し、下士官候補者隊へ入隊を命ぜられました。ところが兵科の教育は一期の三カ月の基本教育だけ、小銃隊出身の私は、軽機関銃も擲弾筒も分からない。そのため、教育隊の中で一人だけ特別教育を受ける。他の者が休んでいる時間に、軽機、擲弾筒を中心に随分厳しく、大変苦しい教育を受けました。

昭和十八年九月ころ、下士官候補者としての教育を終了し帰隊しましたら、独立混成旅団が第六十九師団に編成替えされ、私は師団司令部勤務、暗号班長をやれと命ぜられました。大隊の暗号と異なり、師団の暗号は高度なもので、教育に二〜三カ月が必要だったので、とところが、師団には初年兵が入ってきたので、暗号班長としてではなく、下士官候補者隊出身者であるため、初年兵の教育係を命ぜられました。

この時になり、過去の厳しい教育が役に立ってきた

のです。私の運が良かったのは、若い時に、第二十一師団や第十三師団司令部で軍属勤務をしていたので、師団司令部組織の内容を良く知っていたのが幸いして重要視されたのです。私は重要書類の取り扱いもしたことがあるので司令部では割合重宝がられたのでありましょう。

初年兵教育は大隊本部で終了し、私は第二中隊に復帰しました。下士官候補者隊帰りは五人おりましたが、最後に残ったのは私一人だけでした。

次に河南作戦について申し述べます。昭和十九年五月十日、河堤村から工兵の舟艇で黄河を渡河しました。第一次は独歩兵第八十二大隊、我々の第八十四大隊は第二次渡河でした。対岸の敵は迫撃砲で攻撃、八十二大隊の一個分隊は迫撃砲弾の直撃を受け、黄河の藻屑と消えてしまいました。敵兵は鎖で繋がれていて逃げられないようにしてあったので死に物狂いで抵抗し撃つてくるのです。

我が第八十四大隊は波頭鎮で別行動をとって東方の新安を制圧するため隴海線のもとと山間の東方を迂回

し鉄門を攻略しました。ところが、我が第十二軍におかれて新安の手前で、新安方向から敵の大部隊が逃げてきました。敵は「窮鼠返って猫を咬む」の諺のごとく我が部隊に向かってきて、部隊も相当の被害を受けました。これに対し、我が軍の山砲が射撃、敵集団を分裂させる。敵軍はバラバラになって逃走して行きま

した。我が部隊は第一軍の隷下ですが、第十二軍に策応しての作戦です。我が部隊、第一軍隷下部隊は隴海線確保が任務で、第十二軍は鄭州を陥落させ漢口を目指して南下していきました。五月末で策応河南作戦は終了しました。

その後、第一軍は単独で靈宝作戦を六月一日から開始しました。この作戦には北支那方面軍の命令で戦車隊、工兵等の派遣部隊は原隊に戻されたのです。この靈宝作戦には、米式装備の大軍の抵抗があり、従来の討伐とは大違いでした。特に我が第八十四大隊の被害は一番といわれ、山の分哨七人は玉砕しました。その山を奪取せよとの命令で、この三角山で大激戦を展開

二十二名の戦死者を出しました。敵機の銃爆はありませんでしたが、その日の正午ごろようやく敵軍を退却させたのでした。

第八十二大隊（神保部隊）も陰山廟の戦闘で多くの犠牲者が出ました。山また山の稜線に敵がいて、一山一山奪取するのですから、酷い戦闘の連続です。それでも、日の丸の旗を見ると敵は浮き足だつ、先制攻撃が大切でした。まさに「軍の主とするところは戦闘にあり」が身に浸みて分かりました。私の部下三名も三角山で死んでおります。擲弾筒分隊は白兵戦で銃剣だけで戦う。小銃隊は銃剣突撃ですが、その中に擲弾筒分隊は剣のみで戦ったのでした。霊宝占領まで、ひどい戦闘の連続でした。

六月十二日ころ、兵団は目的を達成して反転し、原駐地へと撤退したのであります。その後、第六十九師団は中支第十三軍の隷下となり、上海に向け大移動を開始、その後は新編成の第五独立警備隊が運城（昔の飛行場あり）を主体として警備をしておりました。

私は終戦の翌年、昭和二十一年一月十三日、佐世保

に上陸復員したのですが、県庁へは復職できず、化学肥料会社に三十年ほど勤務しておりました。

### 【解説】

河南作戦（黄河渡河と霊宝作戦）

第一軍の黄河渡河作戦

第六十九師団は本作戦において天兵团と呼称する。天兵团の独立混成第三旅団を洋兵团、歩兵第五十九旅団を地兵团と呼称した。

地兵团が主渡河隊で、その編成は、歩兵第五十九旅団長木村少将以下、独立歩兵第百一十二大隊（柏木大隊）、同第八十二大隊（神保大隊）、福田悟郎氏所屬の第八十四大隊（斎藤大隊）、その他山砲、工兵、通信部隊である。

渡河作業部隊は独立工兵第五十九大隊で、地兵团渡河後、垣曲えんきよくへ下航し師団司令部以下の渡河に任ずる命を受けていた、渡河点は河堤村である。

任務及び行動の概要 X（渡河日）前夜、渡河準備完了、渡河日夜、二十一時ころ渡河、渡河後、段村、

坡頭鎮を経て澗池かんちに向かい突進し隴海線を遮切し爾後、新安方向に向かう前進を準備す。渡河作業隊は地兵団を渡河せしめたる後、垣曲に下航し、天兵団主力及び軍主力の渡河に任ず。

#### 河堤村方面の渡河（五月九日）

二十一時二十分、日没と共に作業両中隊に出発が指令。三十八分まさに泛水しようとしたとき、重慶軍の射撃が始まった。機船は中隊長の発航指令と共に一斉発航した。重慶軍はこの始動音に驚いたのか、約三十秒間射撃を中止した。やがて舟艇は前岸に到着、歩兵部隊は上陸した。再び猛射を開始し、特に渡河付近に迫撃砲弾が炸裂して、やや混乱の様相を呈した。第二回の渡河部隊の渡場到着が遅れまた出航は間断した。

このとき、木村旅団長は自ら大声叱咤して部隊をまとめ、爾後間断なく渡河することができた。午前一時ごろに至り重慶軍の射撃は全く止み、五時ごろ地兵団主力の渡河を完了した。

この渡場における死傷者

戦死 工兵 四 歩兵 一六  
戦傷 工兵 七 歩兵約二〇

\* 歩兵死傷者の多いのは、二十三時ころ満載した模合船の真ん中に軽迫撃砲弾が命中し、乗船者の被害が大きかったことによる。

#### 靈宝作戦（六月四日頃）の概要

第一軍命令 六・四・一〇三〇

一 敵ハ逐次弘農河東岸地区ニ進出シ約一ヶ師ノ敵ハ大宮付近ニ、約三ヶ師ヲ下ラザル敵ハ險山廟以南地区ニ於テ夫々頭、三角山方向ニ近迫シツツアリ

五 天兵団ハ五日早朝攻撃ヲ開始シ所在ノ敵ヲ撃破

シツツ先ツ弘農河右岸台上ニ進出スベシ

地兵団命令 六・四・一二〇〇 姚店

一 当面ノ敵ハ六月二日夕以來草廟南北ノ高地線ヲ

占領シ陣地構築中ナリ

略

五 斎藤隊（独立八四大隊）ハ右第一線トナリ劉宗

河西側付近ニ展開シ西村部隊ニ連繫シ一、四六

三南方二軒ノ高地ノ敵ヲ攻撃スベシ

六 第一線部隊ノ戦闘地境左ノ如シ

西村部隊

斎藤部隊

三角山一、四二二高地ノ線

六月五日 一軍の攻撃開始（斎藤部隊抜粋）

七時四十分重慶側空軍四機來襲跳梁して、草廬

北川台上に進出した西村・赤星大隊は死傷八〇

余名を出した。

十時三十分ころ、彼我の銃砲声盛んで、部隊の

前進困難が思われた。特に三角山方面は払暁か

ら重慶軍の攻撃を受けており、斎藤大隊は死傷

続出し、たちまち二二名の戦死者を出した。

三角山正面は、神保大隊の突貫突入により、正

午過ぎ、重慶軍は潰走状態となり、斎藤大隊は

断固逆襲して攻撃に転じ、險難な山間を突破し

て、十七時ころ早くも小門河付近に進出した。

軍参謀部は、地兵団のこの疾風のような快進撃

に感激した。

第一軍命令 六・一一・一二〇〇 郭家庄

一 北ハ数線ノ敵陣ヲ突破シ南ハ重疊タル山岳ヲ踏

破シツツ南北相呼応シテ遂ニ敵第八戦区東兵団

ヲ撃破セリ

二 軍ハ既定計画ニ基ツキ十二日日没後反転ヲ開始

シ速ヤカニ原態勢ニ復帰セントス

略

六 天兵団ハ十二日日没後反転ヲ開始シ、……地兵

団ヲ五花嶺周辺ノ地区ニ集結セシムト共に洋兵

団（第六十九師団独立混成第三旅団）ノ一部ヲ

以テ黄村、五原付近ヲ歩兵約二ヶ大隊基幹ノ部

隊ヲ以テ險山廟―梅家山―三角山ニ互ル要線ヲ

占領セシメ軍主力爾後ノ行動ヲ容易ナラシムベ

シ……。

八 予ハ十三日早朝現地出発 三里橋ニ至ル

当面の重慶軍の主力は、潼関方向に退却中でわれに

追躡する大きなものはなく、滞りなく反転作戦を終

わった。

（戦史叢書参考）